

越後國
福島潟
鎌倉潟
白蓮潟
鳥屋野潟

き事なるに、潟の淺深、増減せざる事、まことに不思議の靈場なり、

〔北越雪譜 二編 一〕古歌ある舊蹟

越の湖 蒲原郡に潟とよぶ處多し、里言に湖を潟といふ、その大なるを福島潟といふ、四方三里計、此潟に遠からずして五月雨山あり、貫之の歌に、潮のぼる越の湖近ければ蛤もまたゆられ來にけり、又俊成卿に、恨てもなに、かはせんあはでのみ越の湖みるめなければ、又爲兼卿、年をへてつもりし越の湖は五月雨山の森の雫か、

〔東遊記後編 二〕蚌珠略 中

越後に在ける比、新潟の人の語りしは、此近きあたりに、福島潟といふかたあり、此潟に珠をふくめる貝あり、其大さ三四尺わたりもあらん、月明らかなる夜は、折ふし其貝口を開くに、其珠大さ拳の程もあらんと見えて、曉の明星の出たるごとく、光明赫やくとして、水面にきらめく、人是に近づく時は、忽ち口を閉て、水底に沈み、或は口を開きながら、水上を矢を射るごとくに去る、其貝出る所定らず、何時見るにも、其大さ同じ程なれば、只一つの貝と思はる、折々見るものあれども、昔よりある貝にして、殊に光りあるものなれば、人恐れて取事なし、又あまり程近く見る事なれば、何貝といふ事をする事なし、唐土杯にていふ所の蚌珠にやと沙汰するのみなり、

此福島潟といふは越後にて尤大なる潟にて、竟り六七里に餘りて、江州の湖水を見るがごとし、其外にも鎌倉潟、白蓮潟、鳥屋野潟などいひて、越後には潟と名付るもの甚多し、他國には無きものなり、此越後は唐土の江南の地に似て、廣大なる國にて、しかも疊を敷たるがごとく、甚平坦なる土地なり、其中に大河流る、其土地甚平なる故に、川の流れ急ならず、所々にて河水兩方へくぼみ入りて、溜り水となり、是を彼地にては何方何方といふ、皆甚大にして、二里三里四方、或は五里四方なるも有り、他の國は地狭く、たとひ廣き所にては、土地に高下あれば、川水急に流れて左